九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

雅語俗録 : 参

中野, 三敏

https://doi.org/10.15017/4755974

出版情報：雅俗. 3, pp.222-241, 1996-01-10. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

雅語俗録 参

中野三敏

十四　御講拝聴記　附大学頭月次講釈触状

綱吉の好学、嵩じては自ら経書講釈の挙に及びしこと、元禄三年より十三年迄におよそ二百四十座と常憲院殿御実紀附録巻中にはあり。近臣に始まり、僧徒・親藩諸家、次いで譜代・高家への講釈となり、ついに国持大名百四十余名の講席となりしは、元禄六年癸酉二月のことぞ。列席の一人、肥前鍋島支藩鹿島藩主直條の書留めに「御講拝聴記」なる一紙あり

元禄六年癸酉二月二十二日、尊大君豫命召列国諸侯及外臣百四十餘輩於便殿（俗曰御座間）　僕亦在其列、午時大君御殿坐蓐、老臣数輩跪坐蓐前、近臣柳沢出羽守及林大学頭侯側小臣捧書格進御前、大君手脱腰剣、執書以頂戴、置於書格之上、高講中庸巻首天命章、玉音清朗、経義明辨、満座拝伏欹耳無不感歎之、御講畢、玉顔怡然乃回視群臣、有旨曰、夫文武二道如車雙輪、汝等平日可励学問勉哉、皆恐惶稽首而退矣、嗚呼至哉盛哉、中華置而不論、原夫我本朝之儒教、権輿于應神帝、而天智帝学聖道于南淵先生、文武帝修釈奠于大宝年中、自是以来歴代之天子王公祭孔聖学儒経、国史所載昭々焉、然所恨如嵯峨淳和二帝、唯好文学以詞賦末技為極、学徒競一韻之奇、争一字之巧、唯是風花之興雪月之遊、而実無補世教也、而後無朝野無貴賤、学者其弊彌甚、惟有後三條帝篤信聖道、師尊儒士、起廃継絶、儒風小振矣、中古柳営義尚公在争乱之間而好学、曽陣于近州鉤里、軍中尚不廃書、使老儒清原某講説六経、傅以為美談也、然未聞君主親講経義解衆惑矣、大君曽在藩邸之時、重儒崇道躬仁義之行、及承統之日、頻問林氏家学、初詣忍岡孔廟、近歳新建大成聖殿於昌平坂、構営学寮教育書生、毎有釈奠台駕清道親拝聖像、観其儀、今又有此盛挙、豈唯儒教一朝之懿美而已哉、固是国家万世之盛事也、況講後尊命言約義精、誰不欽仰哉、僕西夷鄙人、生此聖代蒙此栄幸、天恩之渥如山之巍々如

海之深々、何喜加之、謹書其事以伝于子孫云

癸酉仲春下澣　楓園野夫泰窩藤孟幹九拝記

講釈の実況を伝うるに、やゝ文字を惜しみたるは遺憾というべきも、その大体は知ることを得たり。

尚、別所に林大学頭信篤聖堂月次講釈の触状一紙を見る。年次は未詳ながら併せ記す。

明廿四日、大学頭講釈例之通罷出可承旨、御老中被仰渡候間、四つ前御出可被成候、此段能々其方より可申合被仰候条如斯御座候、此回状御被見已後、留り之御方より今晩中筑後守へ御返可被成候、以上

五月廿三日　安藤筑後守

白石伯著守

神尾備前守

藤田安芸守

安藤与十郎様

松平玄蕃頭様

柴田日向守様

長谷川五郎右衛様

妻木彦右衛門様

近藤備中守様

何かと問題はあるべきも、綱吉の学問癖の波及する所は極めて大なりし筈。白石・徂徠もいわばその流れの末の凝りて玉を成せしものとも言はゞいはるべく、生類憐み等の害のみ大いに喧伝せられ、その美点の遂に覆われたる如きは如何か。

十五　安永版「たから合の記」二種

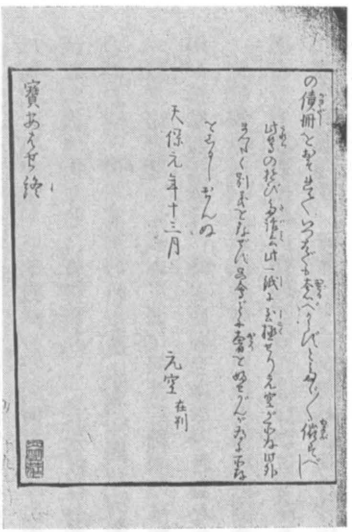
南畝連中、例のいたづらの催しに宝合の会あり。安永の初年（二年説・三年説あり）天明三年の二度に及び、何れも板本となるは皆様御存じ。安永度は外題「たから合の記」。やゝ変形の枡形風中本一冊。天明度は外題「狂文宝合記」半紙本三冊。何れも稀本の部類に入ろうが、特に安永板は、稀書複製会本の一ともなれり。

その安永本、表紙は見事な更紗模様の色刷りにして、恐らく更紗表紙の最初のものか。いかにも配り本らしき出来栄えなるに、それにも二種あるは奇妙というべし。

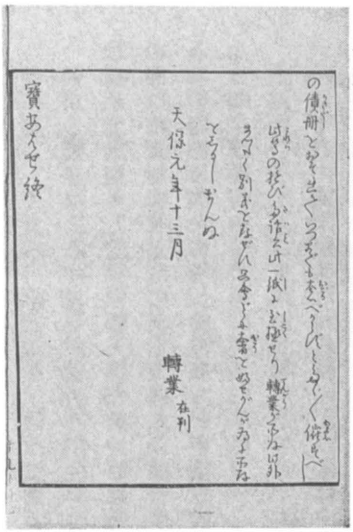
一は巻末、一枚起請のモジリの文末に「天保元年十三

月　元空 在判」とあり、今一つは同じく「轉業 在判」とす。両本とも極めて刷り良く、配り本ならばそう多く刷る筈も無き故、それは当然なるも、何れが早印とも軽々には決めかねる所。恐らく「元空」では余りに「源空」に近すぎる故、遠慮して「転業」などと変えしものならんか。所見本四本、その内尾崎翁旧蔵本（現蓬左文庫本）と架蔵本は元空本。国会と加賀文庫本は転業本。複製会本も転業本。

十五　元空本



十五　轉業本（稀書複製会本）



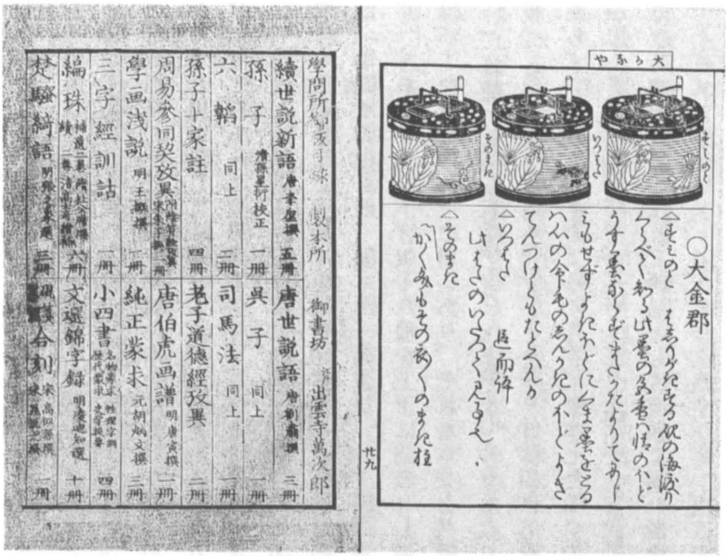
十六　稀書複製会本の怪

過日、某古書肆の販賣目録に洒落本「滸都洒美選」元版一冊、壱万二阡円とありたり。眞に元版なれば随分と安し。或いは複製会本ならんか、それならば随分と高し。名だたる老舗のこと、よもや複製会本を見まがうことあるべからずと思い決して注問せしに、送り来たるを見ればまがうべくもあらぬ複製会本なり。しかるに裏表紙見返しに、通例なれば「印行五百部之内第〇〇號」の朱印か、奥付の印刷されし小紙片を貼布せらるべき所、この本には「学問所御板目録　製本所　御書坊　江戸　出雲寺萬次郎」とありて、以下官版十八種を上下に記載せし藏版目録半丁を奥付代わりに用いあり、それも本文と共紙を用いて綺麗に裏表紙見返しとして製本しありしなり（図版）。どう見ても後人の手による貼り付け如き処置にはあらず、初めよりそのように仕立て製本したるものとしか思へず。某古書肆の「元版　壱万二阡円」の処置、なるほど苦肉の策と思はれ、珍品として有難く購い置きけり。

それ以前にも複製会本の黒本「諸鞚奥州黒」の一冊を完璧にもみほぐし、クタクタの状態となし、原本と偽りしものを買い求めしことあり。この時も危うく気づきて、複製会本と比べ見し所、一点一画見事に同板なること明らかなりしゆえ、そのやつしぶりの余りの見事さに、手元に置くべきかと一瞬とまどいしも、価の高きに、やむを得ずその旨を示して御引き取り願いし事あり。

写真覆製と違いて、いわば覆せ彫りの再板本というべきものゆえ、年月を経れば原版と見まがうことも無きにしもあらねど、まだ百年もたゝぬに、かゝる不徳義は許さるべくもあらず。たゞし複製会本の出来の良さを証すべき一事にもこそ。

十六



十七　「老萊子」と「仙家長寿台」

南畝ついでに、いま一つ。

天明三年、母親六十の賀に、例の連中祝儀の狂文を贈る。翌四年正月、これを「老萊子」と名づけ五巻五冊を蔦重より刊行せしはこれ又よくしられたる所。

しかるに、天明七年頃より、蔦重藏版目録中に、「不老不死仙家長寿台　四方山人集　全五冊　かきりなきめてたき本なり」の広告を見ること多く、然して「仙家長寿台」そのものにつきては、従来何の報告もなし。近代の南畝連ともいうべき三村・玉林・浜田の諸氏も何等言い及ばず、といえば自慢らしきも、要するに「仙家長寿台」は配り本「老萊子」を改題し蔦重の賣り本とせしものなるべしという迄のことなり。

十八　大雅堂書の看板

「山州扁額要覧」中型折帖の両面摺り。「新修京都叢書」にも入るべくして入らざりしは、余りに片々として、般庵先生の目も掠めしなるべし。初篇は弘化二年の中川文

林堂板。二篇は「拾遺扁額要覧」と題して嘉永元年板。編者は晴雲堂葭中易得子とあるも未詳。洛中寺社名をイロハ分けにし、鳥居の額、聯、画、銅物の文字、石碑、燈篭銘等々の筆者名を列挙す。「扁額軌範」の如く原物の摸刻を企てしものとは違い面白味は無し。但し資料価値、情報量は極めて多し。二篇とも巻末にまとめて、洛中諸名店の看板・額・暖簾の筆者の類をあげる所、他書には無きものか。合印は▼暖簾、冂酒銘　▽潤筆など。

光悦　中（糸ヤ丁）▼　御茶ワンヤ　▼（楽吉）

窮楽　亀（中京）▼（ベニヤ）　済生湯　（三条）

龍虎円（サヽヤ丁）　宇治茶（丸タ丁　カマノサ）

龍公美　彦根飛脚（冨小路　三条▽）　御茶（三条　寺丁）

御餅（大宮八条）　ウチミ薬（上同）

などなどとある中、やはり目をひくは大雅堂なり

大雅堂　神伝丸（日暮）　赤万能膏（ナワテ）

黒丸子（四条）　マルメロ円（三条　シン丁）

エヒスヤ　▼（フヤ丁）△（同上）　黒神散（白川ハシ　西）

冂二葉（五条）　嘯風亭　■（堀ハタ）

薬種（鳩居）　書肆（三条　烏丸）

かし物（西洞院　出水）　冂八重菊（ハシ本村）

「拾遺」に

▽糸物組モノ（寺丁　ニシキ）　即功紙（東洞院　二条　ナワテ）

布屋▼（塔ノタン）　風薬ナヲラヌ時ノ一（三）

是妙膏（衣タナ　丸タ町）　振出シ薬（御幸町　衣ワラ下）

精楚貨食　△鬼ノ手（共ニ四条）

此二品在二人口一トモ遺筆今ナシ

さすが書家大雅堂は良く賣れし物と覚ゆ。小笹氏稿か人見氏なりしか、大雅堂筆の看板につきての一文を且て遇目せしことありしも、種はこの辺りか。

他にも

冨小路貞直卿　冂百ヱ山（日暮）

山崎闇斎　神主（下立ウリ　ハシツメ）

細合半斎　御膳ミソ（東洞院　万年寺　西六条）▽

烏石　金寿円

沈草亭　図書店（六角堺丁）

季鷹　青須浜（押小チ）

劉培泉　柳枝軒（六カク　小川）

源孟彤　三宜亭（并）記（馬町丸ヤ）

皆川愿　　舞扇子　烏丸　ナマツヤ

等々あり。

こんなものにも異種板あり。両面摺りならず、全部を片面摺りの折帖に仕立て、中味も若干の異同あり。その異同により、片面摺りの方を後印と認む。

十八

十九　漢訳俚諺

元来、唐出来の諺多きものなるべきに、わざ〳〵俚諺の漢訳を試みしものあり。「訳文拔穎」中本二冊。文化十四年序刊。淇園門の履堂田中大荘編閲とあり、履堂先生、門人の誰それに作文させしもの。例言の一に「原文全係先生ノ口授ニ、而其意本在リ下ニ翻訳シ身近ノ言語若ハ事実ヲ以テ資スルニ於作文上ニ」とあり。訳文習練に俚諺を用いる、思い付きとしては面白し。実際の出来栄えは今一つか。

諺ニ、我身ヲツメッテ人ノ痛ヲ知レト、能ク忠恕ノ訓ニカナヘリ

諺ニ云先爪ヲ吾肌ニ而知ント人之艱ヲ此正ニ合ニ忠恕之訓ニ矣

諺ニ、今マキリハ二十日と云ハ、下男下女ナドノ始メキダチハリチギナルガ、段々ニ油断シテ二十日許ニハ、其シタヂノ気質ガ見ユルヲ云フ

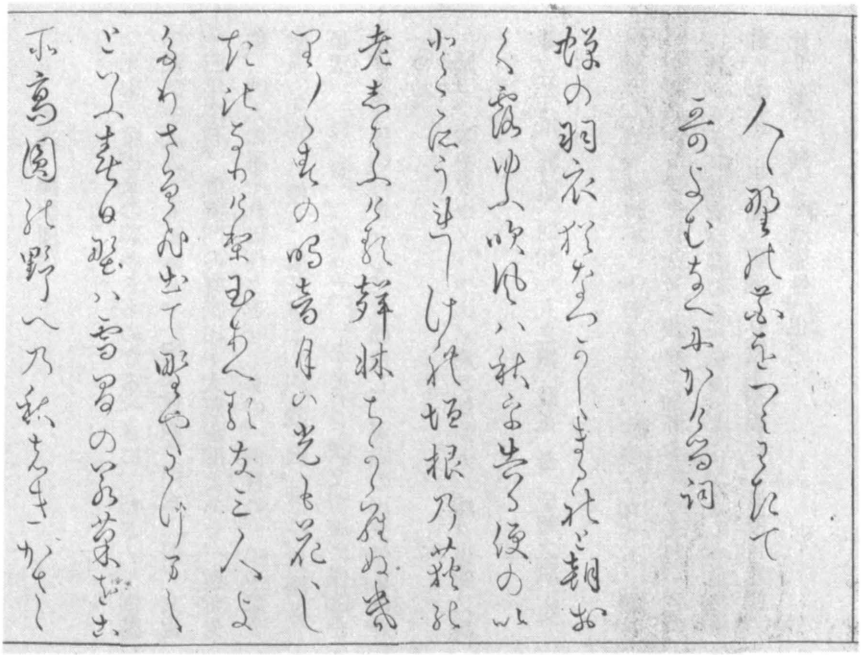
諺ニ云新仕ハ止二旬ト蓋譏下奴婢輩初謹朴ナル者浸自怠慢シテ比ニハ過二二旬ヲ一見中其素性上ヲ也

二百五十許の諺を用うるは一種の諺語辞書とも云うべく、加藤定彦氏の労作「俚諺大成」にも洩れたればこゝに記す。但し収載せし諺語はありふれしものばかり。とはいえ、ありふれぬ諺というも聊かおかしかるべし。

二十　「藤簍冊子」異文一篇

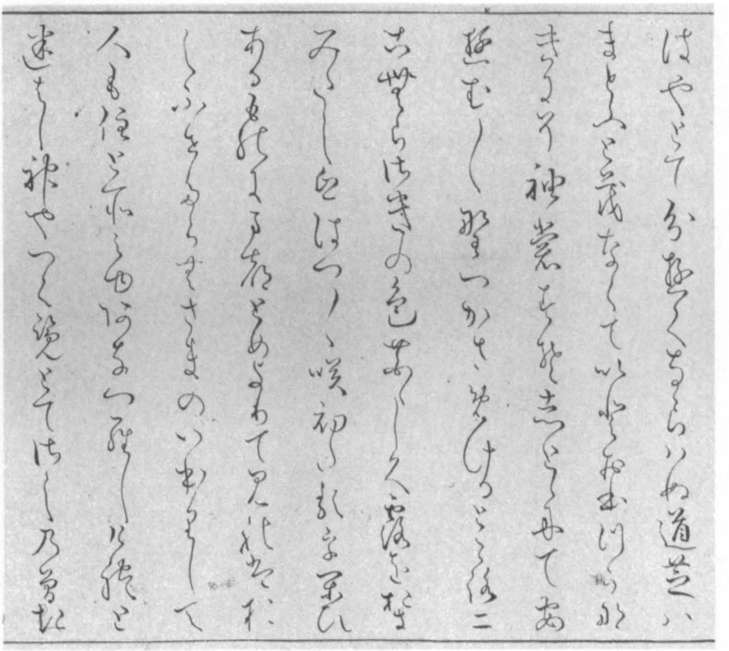
「藤簍冊子」所収の文草に、異文の多きはよく知られたることにて、近刊の「秋成全集」にも、中村先生御自身の筆になる異文の紹介と考証ありて委曲を尽せり。

巻六「秋芽」の異文、自筆巻子一巻あり。約三米の継紙に一一四行の長文。料紙は天地に代赭色の単界を引く秋成好みともいうべきもの。巻末には「阮」「秋成」の墨印二つを捺すのみ。題も「秋芽」ならぬ「人〻野の花をつみわきて哥よむなへにかける詞」とあり、全文を掲げ、板本（全集所収本）との校異を記す。㊀とするもの、即ち板本の文章なり。

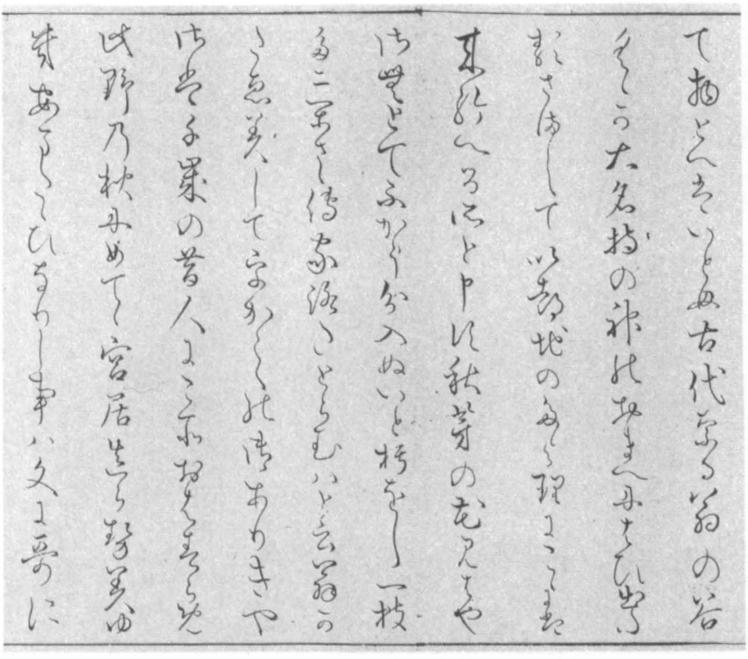


㊀「秋芽」
人々野の花をつみわきて
哥よむなへにかける詞

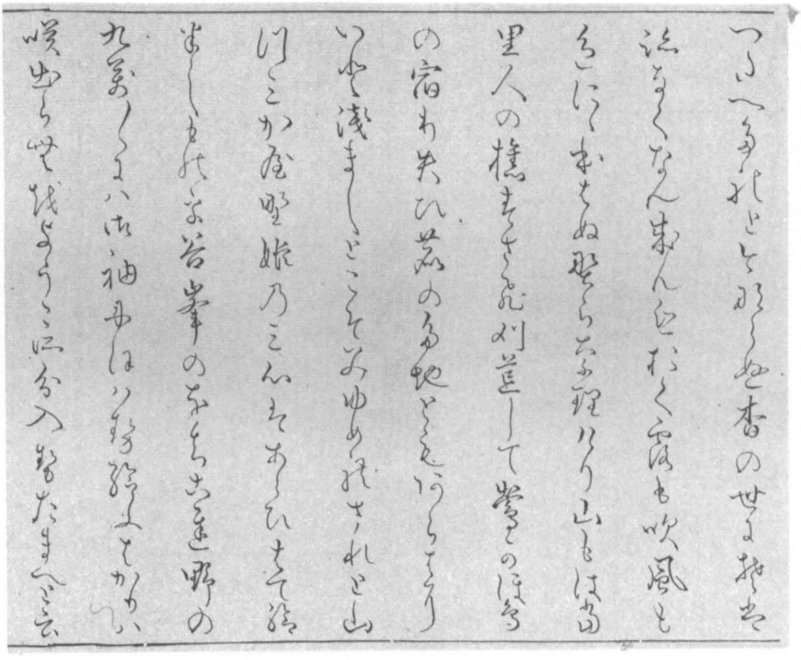
蟬の羽衣猶なつかしまるれと朝お
く露ゆふ吹風は秋を告る便のい
とこそうれしけれ垣根の荻の
老しはふける聲牀ちかゝらぬき
り〳〵すの鳴音月の光も花々し
　㊀「けり」なし
き比なりけり玉あへる友三人よ
たりさそひ出て野やわけまし
　㊀「雪間の若菜をこそ春日野にはまじるべけれ」
といふ春日野は雪間の若菜をこ
そ高圓の野への秋はきかさゝ



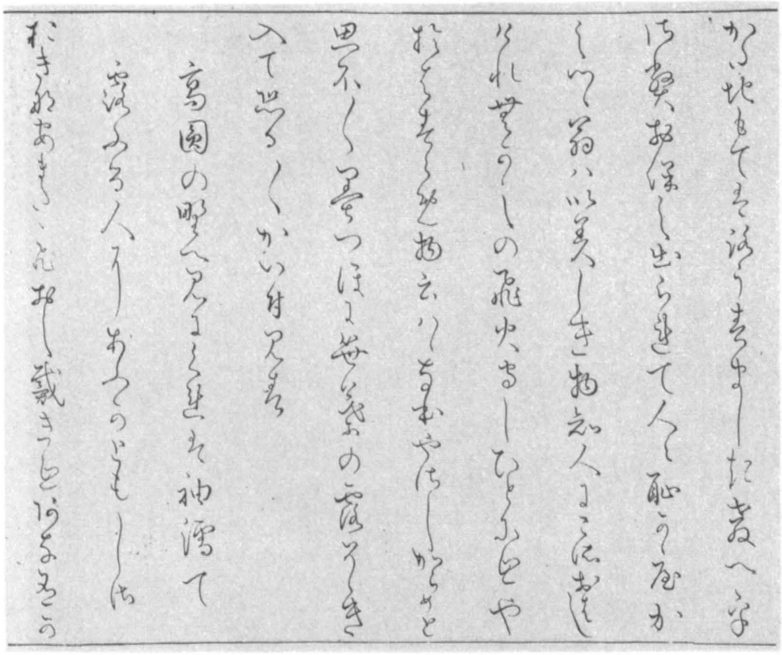
全「来る」
はやとて分ゆくならはぬ道芝は
まとふともなくていとおほつかな
全「さ」
きにそ袖裳すそしとゝにてあ
ゆむ〳〵野つかさめけるところに
全「を」なし
こむらさきの色花〻しく露をおき
全「り」　全「し」
みたしてはつ〳〵咲初たるをかひ
あるものにまつとめよりて見れはお
しふせたらむさまのいほりして
全「ゆる」
人も住とそみゆあなつらしけれと
全「きた」
迷はし神やつく覽とてさしのそき



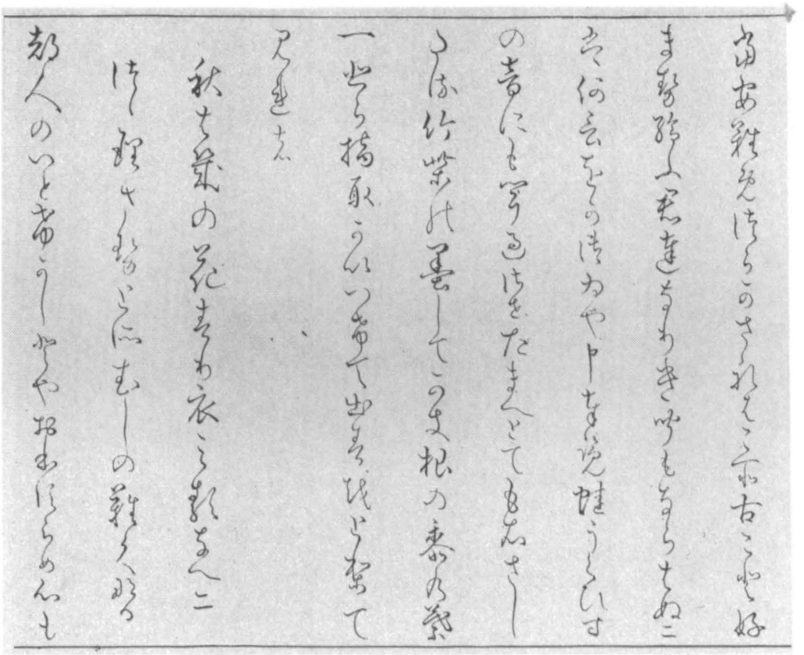
て物とへはいとも古代なる翁の谷
　　㊇「神の」なし
くゝか大名持の神のおまへにはひ出た
　　㊇「は」なし
るさましていつ地のたよりにこゝには
来給へるそと申す秋芽の花見はや
さむとてふかう分入ぬいと朽をし一枝
たにかさゝで家路たとらむはと云翁か
たゑみしてをかしの御ありきや
　　㊇「人達」
さは千歳の昔人にこそおはすらめ
此野の秋にめてゝ宮居造らせみゆ
　　㊇「は」なし
きあまたゝひなりし事は文に哥に



つたへたれと今ならぬ杳の世にそは　㊇「そは」なし
跡なくなん成んておく露も吹風も
色にゝほはぬ野らなりけり山もはた　㊇「には」
里人の樵すさひ刈荒して鶯かほ鳥
の宿り失ひ鹿のたちともあらはに　㊇「を」　㊇「め」なし
いと浅ましとこそみゆめれされと山
つみかや野姫のみ心はあらひはて給　㊇「ばかりは」
はしものを谷峯のをちこち野の　㊇「す」
くま〳〵には御袖にほはせ給ふはかりは
咲出らむをようこそ分入せたまへと云　㊇「たらめ」



かたちもてはろうすましき教へを
さへおほし出られて人〻恥かゝやか
　　㊇「の」　㊇「人」なし
しつゝ翁はいみしき物知人にこそおはし
けれむかしの飛火守しひとにてや
　　㊇「しつらん」
おはすらめ物云はゝなほやさしからめと
思ふ〳〵墨つほに笹葉の露そゝき
入て恐る〳〵かい付見す
　高圓の野へ見にくれは袖濡て
露ふる人にあふかともしさ
　　㊇「てあな有かた」なし
おきなあまたゝひおし戴きてあな有か



たあなめつらかされはこそ古こと好

㊇「御かたゞ」「れ」

ませ給ふ君達なりき聞もならはぬに

㊇「を」なし

は何言をか御ゐや申奉覽蛙うくひす

の音にも聞過させたまへとてもえさし

㊇「炭」

たる竹柴の墨してかき根の黍の葉

㊇「て」なし

一ひら摘取かいつけて出すをとりて

見れは

秋はきの花すり衣みるなへに

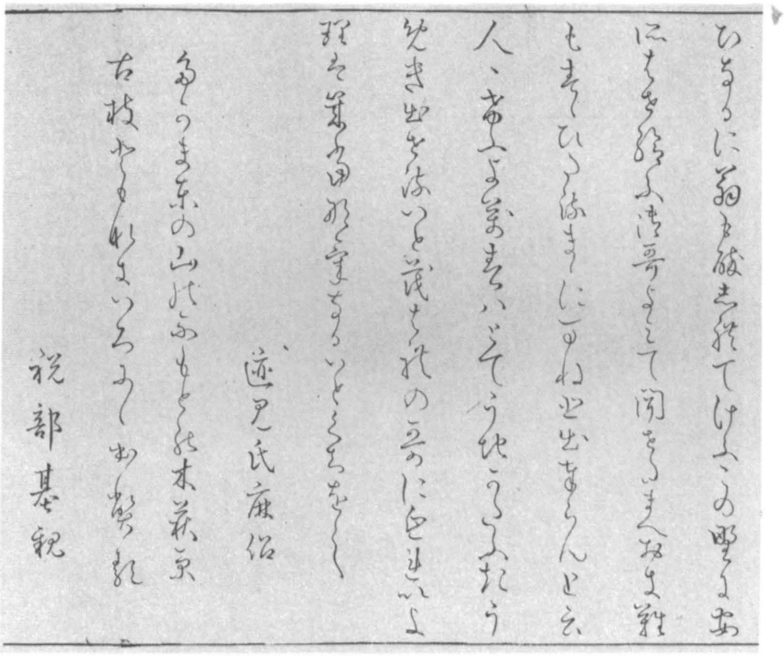
㊇「も」

つゝりさせとそむしのなくなる

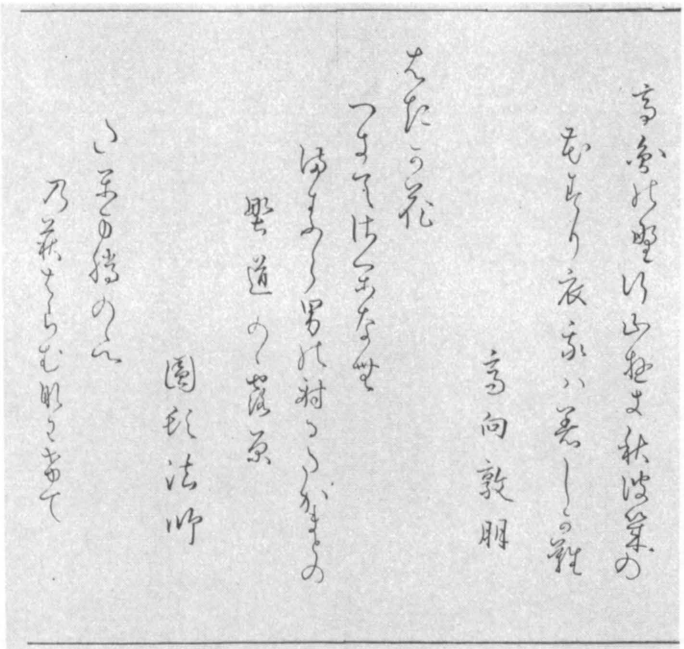
都人のいとけかしとやおほすらめ心も

言も身のさまもきた無麻呂にこそ侍
れといひて打かしこみをる此野の遊
ひこゝを去ていつこならむとて芝生の
塵うちはらひつゝまとゐして翁酒はた
うふやかれ飯もゝたるはとて草のうへに
檜わり子おき散し人々物きかん気に
山辺の鹿の膝折ふせあら野の鶉の
はひもとほりつゝ或はつら杖つき打し
んし聞をる何くれとかたらふいとめつ
らかなる事おほかり盃の流あまたゝ

㊀「は」なし
㊀「檜わり子草の上に」
㊀「聞」なし
㊀「の語事の」

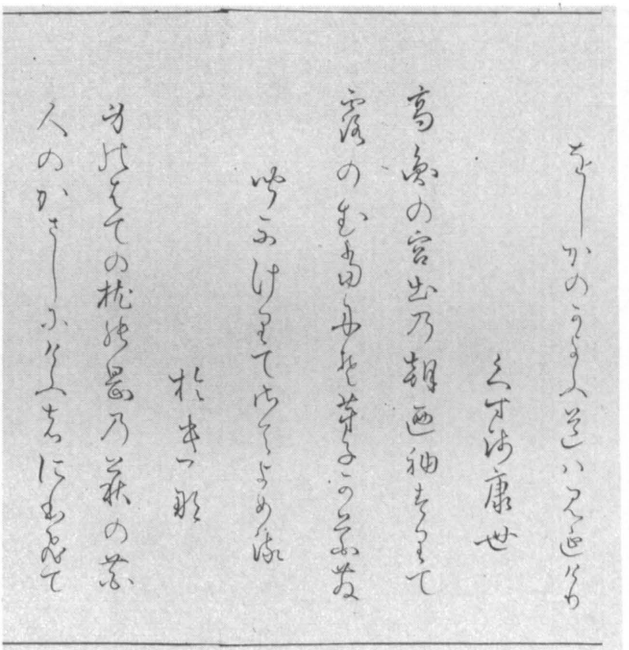


ひなるに翁も酔しれてけふこの野にあ
そはせ給ふ御哥よみて聞せたまへおきな
もすゝひたるまゝにまねひ出奉らんと云
（全「出」なし）
人〻けふよますはとてうちかたふきう
めき出せるいともはれの哥にてれいよ
りはきたなけなるいとくちをし
（全「祝部基因」）
迹見氏麻侶
（全「眞」）
たかまとの山のふもとの木萩原
（全「みだれて花さきにほふ」）
古枝ともなきいろにゝほへる
（全「度会氏麻呂」）
祝部　基親



高圓の野行山ゆき秋はきの
　　㊀「ぞ匂はす」
花すり衣我は着しかな
　　㊀「日陰」
　　高向敦朋

　　㊀「の」
はきか花
つきてさかなむ
ますら男の射るたかまとの
　　㊀「べ」
　野道の露原
　　㊀「大了」
　　圓頓法師
　　㊀「路」
たかまとのゝへ
の萩はらむなわけて



をしかのかよふ道は見えけり

㊀「和気垂水」

くす師康世

高圓の宮出の朝廼袖すりて

㊀「の」

露のむたにそ芽子か花散

㊀「　鞍作植竹

はぎの花今盛なり高まどの

野にいほりしてひとやどりせん」

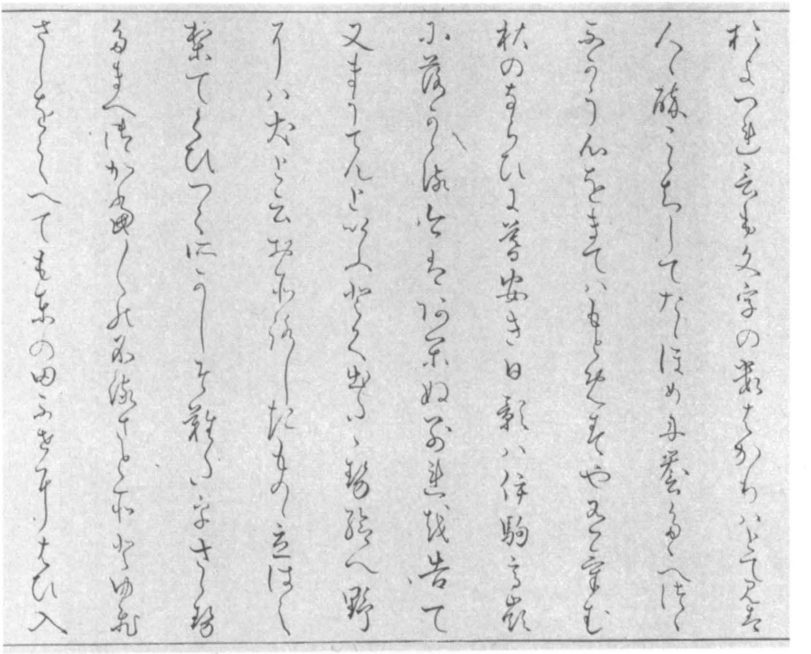
㊀「やや聞」

聞ふけりてさてよめる

おきな

身のはての枕の岡の萩の花

人のかさしにけふはにほひて

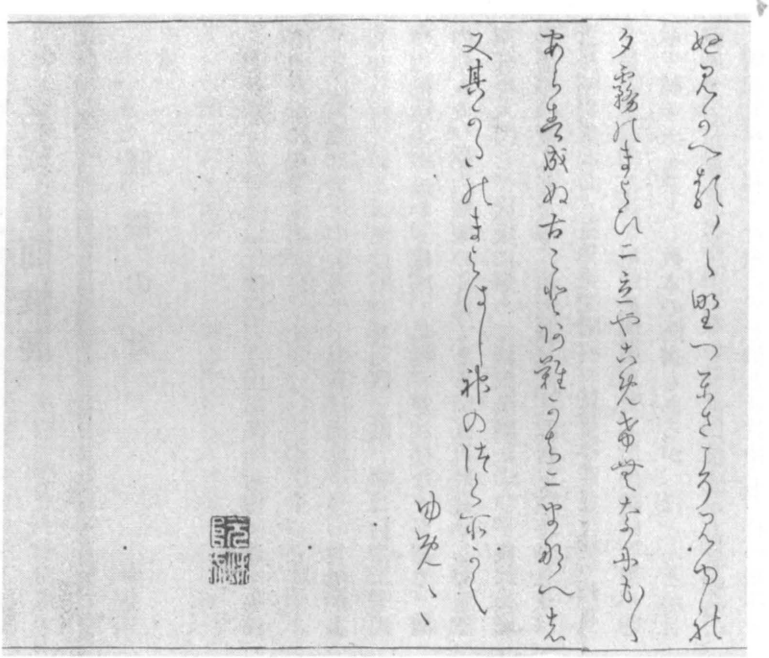


㊀「する」
およつれ言も文字の数はかりはとて見す

㊀「誉たゝへつゝ」なし
人〻酔こゝちしてたゝほめに誉たゝへつゝ
ふかう心をまてはもとめすや有けむ

㊀「影」なし
秋のならひに暮安き日影は伊駒高嶺
に落かゝる今はあかぬ別れを告て
又まうてんといふとく出たゝせ給へ野
には犬と云おそろしきものゝ立はし
りてくひつくそかしそなたをさゝせ

㊀「家路」
たまへ御かた〳〵のふるさとそとゆひ
さしをしへてもとの田ふせにはひ入



ぬ見かへる〳〵野つかさこそ見ゆれ

夕霧のまよひに立やこめけむなにも〳〵

あらす成ぬ古ことあなかちにまなへは

又其かたのまよはし神のつくそかし

ゆめ〳〵

阮秋成